

数年間コロナ禍で閉塞していた作品群が急に開けた印象となった。一見個人の身体には直接影響がないと思われる社会状況や集団意識がかくも作品に反映された。身体は時代の集団的意識と通底せざるを得ないという事実を今後検証する必要があるだろう。同時にそこから自立した身体性は果たして可能なのか。

松崎桃子の商業的なダンスからコンテンポラリー世界の飛翔。斎藤健一のもう一度モダニズム原理主義を検証するような禁欲的な作品。理念の隙間に有する吐息やビニールの衣擦れ。SHIon のダークな美学に支えられた世界観。秋田乃梨子の言語と肉体言語との関係性。そしてウーハーの効いた音による彫刻的な空間把握。安永ひよりの三拍子による日常の動作と可笑しくも不気味な傀儡的な世界。北村 桜の幼少の頃の夕暮れどきマジックアワーの奈落の悪夢に引き込まれていくような深淵。今井亜子の記号化できない地下水脈や意識化の表象。Lo-Fi に象徴されるプンクトゥム的な体験。オカダヒロエの洗練された構成やダンサーの固有性を重視した独特なコレオグラフィ。三輪麗水の恵まれた身体と身体能力。何よりも自由が魅力だ。そして最後に特筆すべきは宮 悠介の表現と身体のかたまりの物語性の分裂や肉薄だ。否定の物語から発した作品は、人生の影をダンスを通して見事に表現していた。

ヴィヴィアン佐藤
(美術家)

ここ数年、物理的にも心理的にも「閉じている」と感じる作品が多かった。体を使って社会に向き合うコンテンポラリーダンスだからこそ、とても創りにくい時間を過ごした振付家も多かったはずだ。でも今年は「開かれている」作品ばかりだった。それは一緒に作っているメンバーに対してや、観客、もしくは世界に対してなど、自分のため以上に誰か・何かのための創作だったのだろう。一観客として嬉しかったと同時に、若い作り手たちが前向きな創作を続けてくれることに大きな勇気ももらった。

SNS が乱立し、誰もが気軽に作品を発表できる時代に、生身の体を使って踊ることの切実さを強く感じる作品が最優秀新人賞に輝いた。受賞を逃したファイナリストたちも、多くの方に作品を見てもらい、誰かに自分の作品のことを説明する、という行為そのものがすごく重要で貴重な機会だったのだと、感じてもらいたい。芸術とは社会や世界を映すものだ。こんな時代だからこそ、今しか生まれえない作品を作り続けて欲しい。

このコンペティションを通して「振り付けとは何か？」ということを更新するような作品と出逢い続けたい。

加藤弓奈
(急な坂スタジオ ディレクター)

ファイナリストの皆さん、エントリーして下さった全ての皆さんに感謝申し上げます。

「表現におけるコロナの夜明け」を感じる個性豊かな上演作品が立ち並んだ本年。身体・作品へ向かう実直な姿勢が様々な表現に帰結し、その多様性がゆえに審査員の意見は一部で分かれましました。

作品コンセプトが色濃く立ち現れた[斎藤健一さん・今井亜子さん]には、完成度の高さから次作への期待感を抱きました。一方で類い稀な身体性が光った [三輪麗水さん・SHIon さん]は、作品性を凌駕するエネルギーに満ちていました。その両方のバランスが取れた印象の[宮 悠介さん・オカダヒロエさん]。また、[安永ひよりさん]を加えた 3 作品からはソロ・群舞に関わらず空間をデザインする意識も感じられました。全体を通して非常にレベルが高く、今後の評価基準について審査員内で言及する場面もありました。

本来ダンスとは審査されるものではなく、観客に向けて放たれる(或いは共有する)ものだと思います。そして表現は (コンテンポラリーという言葉借りれば)、常に時代と共に変容すべきだと感じます。受賞の有無やファイナリストの選出に限らず全ての皆さんに「今回の結果が全てではない」とお伝えすると同時に、この先も「何かの価値基準に合わせた創作ではなく自身にとって必要不可欠な表現」を探求し続けてもらえたらと切に願います。その表現が観客の感性や人生と深くコミット出来る瞬間を求めて。ダンスの未来に期待しています！

北尾 亘

(Baobab 主宰・振付家・ダンサー)

披露された 10 作品は、似た傾向がまったく見られない、それぞれ独自性の強い作品ばかりで面白かったと同時に、あまりにヴァリエティに富んでいるがゆえに審査の尺度をどこに置くべきか、非常に悩ましくもあった。

そのなかで最優秀新人賞に選ばれた宮悠介『かたち』は、作品をたんなる赤裸々な自虐的語りにとどめない、繊細に考え抜かれた音と照明の緩急に富んだ配置に作家としての強い可能性を感じた。次回作ではソロの語りとは違う、デュオやトリオなど、新たな挑戦を期待したい。奨励賞の斎藤健一『回転プロダクション』は、そのコンセプトチュアルな作品を成立させる絵画的感覚が光る。ベストダンサー賞の三輪麗水の身体の強度がとても印象的で、今後さまざまなコリオグラファーとの出会いが彼女のクリエイティビティに大きな刺激を与えることを願う。コンテンポラリーダンスの定型からいかにズレていくかを探る安永ひより『あぶくの音』、音楽と動きの関係性が新鮮だった北村桜『真夏の家路』、動きと構成に対する独特のセンスが今後に期待を抱かせるオカダヒロエ『シリアルボーイ』なども忘れがたい。

新型コロナウイルスによる苦難からようやく脱しつつある今回、若い創造の力が新たに芽吹き出していることを強く感じさせた。次回どんな才能が横浜に登場するかいまから楽しみでならない。

浜野文雄

(新書館「ダンスマガジン」編集委員)